

# 子どもとスポーツの問題

## The problem of a child and a sport

1K08B235-4

横谷 大祐

主査 寒川 恒夫

副査 石井 昌幸

### 第1章

私は高校から大学に至る7年間ラグビーというスポーツをしてきた。その中で多くの人と出会い、様々な経験を積むことによってスポーツをすることの素晴らしさを学ぶことが出来た。近年は全くスポーツをしない子供と低年齢から競技スポーツに参加する子供での二極化の傾向が現代の子供の特徴になっている。スポーツを全くしない子と、幼いときから競技スポーツに励む子ではそれぞれ違った問題を抱えていると言える。また、最近ではその中間である遊びの部分やちょっと体を動かすというようなことが減ってきていると感じる。どんな子供でも身体を動かすことの楽しさを感じられ、スポーツとふれあい、心身ともに成長することのできる社会にするためにはどうしたら良いか。また、そこから日本はスポーツをどのように捉えていくべきか。スポーツで日本をより良くしていくと考えたとき、どのようなアプローチをすることが出来るのか。

スポーツの持つ可能性と力を知りたくて調べることにした。

### 第2章

日本では、諸外国、とりわけヨーロッパ諸国に見られるような幼少・少年期から青年・成人期に至るまで所属可能なクラブチームは発達していない。小学生以下の年齢層では自治体が主催する大会への出場を目指すスポーツクラブでの活動が多く、中学、高校、大学といった年齢層では学校での部活動が中心となり、少年期・青年期のスポーツ活動は自治体や学校教育期間が支えているという側面が強い。

### 第3章

子供の体力がピークだった昭和60年度と比べ低水準にとどまり、運動をしない子供が増えており、運動をする子供とそうでない子供の「二極化」が進んでいることが分かった。運動時間が長い子供ほど体力が高く、時間が短い子供では低下している傾向がみられる。一方で、身長、体重など子どもの体格は向上している。このように、体格が向上しているにもかかわらず、体力・運

動能力が低下していることは、体力の低下が深刻な状況であることを示している。

### 第4章

現代における子ども達の現状に運動をする時間・空間・仲間がないという問題がある。これらすべての問題の解決は政府の協力なくしては出来ないと考える。私自身、中学受験を経験した身であり、小学校の1クラスが20人弱という人数であったため、この問題を解決しようと考えたとき保護者の協力だけでは限界があると感じた。中学受験の学力を学校で補えば、塾なんて行かずに放課後は習い事や好きな運動や遊びをすることができる。私はここに政府が改善すべき日本の教育の問題があると思っている。

### 第5章

スポーツにおける子どもの問題。そこには日本のスポーツに対する考え方、教育制度、スポーツを取り上げるメディアなど様々な問題が絡んでいると分かった。スポーツを精神鍛錬の場としか考えず、楽しむということが欠落した指導。また幼少期から1つのスポーツしか行わず、勝利至上主義のため勝つことにしか目を向けない考え方。スポーツのニュースは明るい話題として取り上げられ、一部ではアイドルのような扱いをされているが、裏を見れば暴力事件や薬物の不正使用など深刻な問題が次々と出てくる。政治家は選挙になればオリンピックのメダリストや元プロ野球選手などの人気目当てに候補者として抜擢するが、その割には、スポーツを活用した施策や公約はほとんどない。日本の政治はスポーツに関心を持っていないのが現状である。これからの日本は世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を突き進まなくてはならない。現代社会に宿る大きな問題のひとつ「地域コミュニティの崩壊」、そこから誘発される「無縁社会」。地域コミュニティを再生、創成するために、いまスポーツの持つ力を認識すべきだ。